

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからいにて行ずるにあらざれば、非行という。わがはからいにてつくる善にもあらざれば、非善という。ひとえに他力にして、自力をはなれたるゆえに、行者のためには非行非善なりと云々。

北第3組 即信寺住職

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

第8章 仏からの道

第八章は、念仏が如来回向の大道であることを明かす章だといわれています。しかし、文中に大道という語はなく、文全体が「非行・非善」という言葉で貫かれています。そこに、広大な世界に出会いながら、それを私有化し、念仏をも「自行・自善」としてしまふ我執の根深さが歎異されているのです。

聖道門において「行」とは、戒律を守り、仏説に示された理法を観想するなど、諸善万行を成仏のための手段として行ずることです。そこに求められるものは、自らの力量への信頼であり、難行に耐え抜く強固な意志です。

しかし、それらの難行は凡夫の身においてはかなわないことであり、成仏をもたらすものとは成り得ません。その凡夫の身を悲しんで仏は本願を起し、浄土を建立されたのです。さらにその浄土を私たちに届けようと、仏からつけて下さった道が、「浄土真実の行」たる称名念仏です。

それは念仏になった真実であり、念仏となった浄土ということです。つまり念仏申すところに、すでに仏が顕れて下さっているということですから、浄土真宗における念仏行とは、「称名を手段とし、それによって往生し、仏を観ずる」ということではありません。

しかしこれが領けないのです。その理由のひとつとして、先述した聖道門における行の受け止めと同じような了解や思い込みが、真宗の教えを聞く私たちの中にも潜在的にあるからだと思います。ですから、「大道についての教理」は理解することができても、念仏は「仏からの道」としてすでに行じられてあることが受け取りにくいのです。結果、念仏は対象化され、手段化され、「自行・

自善」として取り込まれていくのです。

しかし、この姿こそが私たちの無始以来の迷いの現れなのです。私たちは人として生きる上で、倫理・道徳を身につけ、知力・体力を向上させて社会に認められる人間となることが理想であるという価値観に育てられ続けています。その実現のために自らの力量を信じ、強固な意志を持って努力することが最善なあり方であると信じて疑いません。

そういう意識のまま念仏の救いを求めようとしても、「理想の自分になるための救い」を求めるものとなり、念仏もそのことを間に合わせるための手段となってしまう。ここに仏願との大きなすれ違いがあります。

曾我先生は「念仏申したら助かるのではない、念仏申さなければ助からない私なのです」と言われます。「念仏申したら助かる」とは、初めから助かる自分を想定しているのであり、「助かる」の内実も理想の自分になる」という自我の延長にほかなりません。

「念仏申さなければ助からない私」とは、どこどこまでも自分を立てようとする私に、そのあり方では救われないことを教え続けるのが念仏だということです。

しかし同時にそれは、自分を立てようとする自力の心によって自他の差別を生み続ける中で、その差別の苦悩から解放されることを希求し続けているという、矛盾した私が存在しているということでもあるのです。

その矛盾した私とは「世を汚し続けている自分が見えるか、犯罪者の中にも仏になるものを見出していけるか、そういう人として拝んでいけるか」と問い続ける私であり、「如来よ、そういう眼を与えて下さい」と念じ続ける私なのです。その私自身に目覚めさせようと仏願が起こされたのであり、その私のために念仏を届けて下さっているのです。

「非行・非善」とは、人間のはからいをどれだけ尽くしても仏には成れないということです。しかし人間は、一生涯はからい続ける存在です。聞いても聞いても、念仏を「自行自善」と握りしめていくのが凡夫です。仏は、その自力のぬぐい難きことを見抜き、よき人の仰せを聞き続けよと「諸仏称名の願」を選択されたのです。